

人類に対する神の怒り

— 初期ラテン教父における議論の位置付け —

津 田 謙 治

1. 問題提起⁽¹⁾

神の靈感によって書かれたとされる聖なる書物の中で、神は人間に愛と慈しみを与えると同時に、怒りによって人間を罰し、裁く神として描写されることがある。たとえば、創世記において、神は最初の人間のためにエデンに園を設けたが（創世2：8-17）、そこで掟を破った男と女に対し、生活の労苦を与えるとともに、永遠の命から遠ざけ、園から追放したとされている（創世3：6-24）。キリスト教においてこの出来事は、2世紀の比較的初期の護教家たちにおいて、怒りの感情を表す神の本性や存在論に関する考察と結び付くのではなく、むしろ真理を選択する能力を与えられていた人間が決断した結果であるとする理解が見出され⁽²⁾、それは中世以降の人間の自由意志の行使の結果と見なす考え方に繋がっていったと捉えられうる。

他方で、特に旧約聖書で語られる神は、この最初の人間の墮罪以降、聖書を字義的に読む人間の目からすれば理不尽に怒る恐れの対象として見られることがあった。律法で規定された炭火⁽³⁾を使わずに神に香を焚いた二人の祭司（アロンの子ナダブとアビフ）は神によって焼き尽くされ（レビ10：1）、異教徒のモアブ人の王バラクに神ヤハウエの言葉を伝えようとした魔術師バラムは、事前に神自身から許可を得ていたにもかかわらず、出立すると神の怒りによって抜き身の剣を持った天使を送り込まれた（民数22：22）。また、ダビデの命によってエルサレムに向かって神の契約の箱を牛車で運んでいたウザは、落下しそうになった聖なる箱を手で押さえたために神の怒りによっ

てその場で打たれて命を落としている（サムエル下6：7）。

神のこのような怒りに対し、上述のような護教家や、彼らに影響を受けた初期の教父たちがキリスト教の内部でそれを様々なかたちで受容しようと試みる一方で⁽⁴⁾、このような怒りの感情と共に、激情の神そのものを救済の枠組みから切り離そうとする者たちが2世紀に現れた。そのような人物の一人であるシノペのマルキオン（160年頃没）は、人類に怒り、裁く神は、確かに万物を造り出した創造主に違いないが、キリストの説いた救いの神とは異なるものと理解した。彼に拠れば、創造者は人間に律法を課し、遵守できない者を裁く義の神であるが、キリストが宣べ伝えた神はただ愛される善の神であるとされる。

「そのうえ、マルキオン派の者たちは、自分たちの神が全く恐れられないことを誇っている。悪い〔神〕は恐れられるが、善い〔神〕は愛されるのだ、と」（テルトゥリアヌス『マルキオン反駁⁽⁵⁾』1, 25, 2）。

上述の文章は、マルキオンを批判したテルトゥリアヌス（160頃-225頃）の風刺的な見解の一部であり、実際にはマルキオンはゾロアスター教のような悪神と善神の二神論を説いたのではない⁽⁶⁾。しかし、「悪い〔神〕」の部分を誇張と見なすとしても、マルキオン主義者が、人間に罰を与え、裁くことから切り離された神を奉じていたことがテキストからは推察される。マルキオンの説いた二つの神々は、単純化すれば、創造神と救済神、義の神と善の神、律法の神と福音の神、そして旧約の神と新約の神から成る二元論的なものである。それでは、このような神論の形成に、神の怒りなどの感情は、どのようなかたちで関わっているのだろうか。また、彼の説く神論に対して、正統教会はどのように応答したのか、またその応答はどのように思想的に位置付けられるのか、これらを明らかにすることが本稿の目的である。ここでは、2-4世紀の西方世界における議論に限定したうえで、マルキオン派の主張を反駁したカルタゴのテルトゥリアヌスの記述を分析の基底として、彼に部分的に影響を受けたとされるラクタンティウス（250頃-325頃）の議論と比較考察を試みる。

2. マルキオンにおける「創造者の怒り」

すでに見たように、特に旧約聖書には人間の様々な行為に対して激昂する神が描かれているが、マルキオンにとって、創造者は原初から怒り、裁く神であったのではなく、このような神の在り方は最初の人間の墮罪と強く結び付けられている。

「そのようにしてこの〔創造〕神は、人間が罪を犯すまでは最初、ただ善き者であったが、〔墮罪〕以来、裁く者〔iudex〕であり、厳格〔seuerus〕で、マルキオン派がそう望んでいるように、残酷〔saeuus〕である」(テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』2, 11, 1)。

最初の人間アダムとエバの犯した罪以来、裁く者となった創造神は、人間に律法を授与し、自らの掟と戒めに従う者には報いを、背く者には罰を与えるとされる。マルキオンによれば、上述のように災いや死、そして場合によっては悪霊を送り込むことによって(サムエル上16:14-15)、戒めに背く人間を罰するこの神は、悪の神ではなく義の神として理解すべきであるとされる⁽⁷⁾。この神は、おそらく来たるべき日にメシアを遣わしてユダヤ人を救済するが⁽⁸⁾、その救い主は、福音を伝えたキリストとは全く異なる存在であり、ユダヤ人だけを救う者と見なされる。また、マルキオンによれば、キリストの神による救済は、律法遵守によってではなく、信仰によって与るものであって⁽⁹⁾、そこには地獄や罰のような脅迫はなく、ただ愛によって神に受け入れられるとされている。

創造者が怒り、恐れられる神である一方で、キリストの救済者に怒りが欠如していることは、テルトゥリアヌスよりも四半世紀ほど前に活躍したエイレナイオスの文章にも見出される。

「これに対して、彼ら〔異端者たち〕は神にはふさわしくないということで、〔神が人間を〕罰することを、父であり裁き手である〔神〕から取

り去るのである。そして、腹を立てることのない [sine iracundia]、善である神を自分たちが見出したものと信じ込み、一方 [の神] は裁き、もう一方 [の神] は救うのだと言うが、彼らは [実際のところ] 二つの神を知っていないし、[両者から神としての] 理解と正当性を取り去ってしまっているのである」(エイレナイオス『異端反駁⁽¹⁰⁾』3, 25, 2)。

エイレナイオスの記述は、父なる神が罰し、人類に怒りの感情をもつことをマルキオン主義者たちが否定していたことを明らかにしている。マルキオンに対する反駁書を、上述のエイレナイオスに影響を受けて著したとされるテルトゥリアヌスは、自分の敵対者が創造神の怒りを否定的なものとして捉えていることを次のように批判している。

「また同様に [おかしいのは]、おまえ [マルキオン] がその神 [創造神] を実際に裁く者であると認めるのに、神が裁きの際に用いるその情動 [motus] や感情 [sensus] をおまえが拒んでいることである。我々が神について知るのは、預言者とキリストから [a prophetis et a Christo] であって、哲学者たちやエピクロスからではない [non a philosophis nec ab Epicuro]」(テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』2, 16, 2)。

テルトゥリアヌスは、この議論の前に、マルキオンのような考え方では、神における善と義の結合と一致が崩れるために、それらが分離することはありえないと議論しているが、そのうえで彼は、マルキオンのように義の神が裁きの際に抱く感情を否定することを批判する。ここでテルトゥリアヌスは、神が如何なる感情ももちえないとするのは、哲学者たち、特にエピクロス派の議論であり、キリスト教にそぐわないと指摘している⁽¹¹⁾。

ここでの批判の中では、マルキオンの二神論的な教説の根底にあるものの一つとして、神の感情と哲学的な影響がテルトゥリアヌスによって指摘されているが、19世紀以来のマルキオンに関する研究史においては、マルキオンの思想全体から導き出される影響として、マルキオンと同様に二元論的な思想をもったグノーシスの影響や、「目には目を」(出エジプト 21:24)の報復

を勧める旧約の神と「右の頬を打たれたら左の頬を向ける」(マタイ5:39)ことを説く新約の神という聖書的な思考が中心となっていた。マルキオンが哲学から影響を受けたとされる議論は、上述のエイレナイオスやテルトゥリアヌスだけでなく、ヒッポリュトス(170頃-236頃)など古代の教父たちが頻繁に指摘していたにもかかわらず、教会史家 A. v. ハルナック(Harnack)(1851-1930)の著したモノグラフの影響もあって、あまり重視されなかったように見える。その背景には、テルトゥリアヌスのような教父たちが、意図的に異端者たちを哲学に唆された愚かな存在として描こうとし⁽¹²⁾、また異端者たちの思想を偏見と歪曲によって叙述してきたことが一方にあり、他方ではハルナックが、宗教的教説のギリシア化ないしは哲学化によって混淆主義と化したユダヤ教的要素を取り込むことによって、キリストの純粋な教えの頹落を危惧した人物としてのマルキオン像を強力に描いたことが挙げられる⁽¹³⁾。ハルナックに拠れば、テルトゥリアヌスだけでなく、複数の教父たちがマルキオンとストア派、エピクロス、犬儒派、エンペドクレス、ピュタゴラス、プラトンとの密接な関係を説いているが、そのような見取図は相互に矛盾し、そのような哲学的要素はマルキオンの中に見られることはないと言われる⁽¹⁴⁾。

しかし、近年のマルキオン研究は、このような呪縛から十分に解き放たれているように見え、マルキオンにおける天を超えた神と地上を創造した神の関係を、プラトン主義に近接したかたちで理解しようとする研究も見出される⁽¹⁵⁾。特に、マルキオンにおける質料概念も含んだ、神的な多元論的構造は、同時代の哲学の影響を抜きにして考察することは困難を伴うように見える⁽¹⁶⁾。他方で、特に神と感情に関する議論について言えば、M. ポーレンツ(Pohlenz)(1872-1962)が、ハルナックがマルキオン研究の金字塔となる上述のモノグラフ(1923年)を著す以前から、マルキオンへのストア派の影響を指摘していた⁽¹⁷⁾。ポーレンツは、ハルナックのモノグラフが出版され、それを読んだ後もその立場を変えず、むしろハルナックの解釈を誤りとして批判し⁽¹⁸⁾、マルキオンの救済神に怒りが欠落しているのは、ストア派のアパテイアの影響であり、またこの神がユダヤ人だけでなくすべての民族を救うと

するのは、ストア派における万物に浸透するロゴスの教説と強い関連性があると指摘している⁽¹⁹⁾。ロゴスの教説との関わりについては割愛するが、心の平静や不動心を意味するアパテイアについてはここでふれておく必要があるであろう。

ディオゲネス・ラエルティオス（3c.前半）の伝えるストア派、特にゼノン（前335-263）の感情に関する議論に拠れば、彼らは「悲しみ」「恐れ」「欲望」「喜び」の四つの基本感情を措定し、さらにそれぞれの基本感情の下に、嫉妬などの感情を下位に区分している。ここでは、マルキオンの神論に関わる「怒り」の感情は、「欲望」という基本感情の下に位置付けられている。

「また欲望〔ἐπιθυμία〕とは、理性を欠いた欲求〔ἄλογος ὄρεξις〕であつて、この欲望の下には、次のようなものも組み入れられている。すなわち、切望、憎しみ、争い好き、怒り〔ὀργή〕、恋愛、怨恨、腹立ちである。……怒りとは、不当な仕方では不正を加えたと思われる人に復讐〔τιμωρία〕したいという欲望である」（ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝⁽²⁰⁾』7, 113）。

「怒り」と同じ区分には、「憎しみ」や「怨恨」なども包含されているが、復讐への欲望という捉え方は、同じストア派では後の時代のセネカ（前1-後65）や、またアリストテレス（前384-322）など別の哲学の間でも共有されている。

「怒り〔ira〕とは、不正に対して復讐することへの欲望〔cupiditas ulciscendae iniuriae〕である。または、ポセイドニオス〔前135-51〕が言うように、自分が不正に害されたとみなす相手を罰することへの欲望である。ある人々〔不明、エピクロス派の可能性あり〕は、次のように定義した。すなわち、怒りとは、害を加えたか、害を加えようと欲した者を害することへの心の激動である。……アリストテレスの〔怒りについての〕定義は、我々のものから大きくは離れていない。というのも、怒りとは、苦痛に対する復讐の欲望〔cupiditatem doloris reponendi〕で

あると彼は述べているからである」(セネカ『怒りについて⁽²¹⁾』1, 2, 3b-3, 3)。

ストア派では、賢者はこのような感情から自由な者、すなわちアパテイアの境地にあると考えられている。セネカによれば、賢者は、怒りを抑えるのではなく、最初から怒りを撥ねつけるのであって、それは城門に敵を入れないのと同様であると説いている⁽²²⁾。ただし、アパテイアは無感情というものとは異なっており、無味乾燥した人格をもつ者が賢者とは見なしにくいいため、賢者は感情に溺れることなく、「悦び」「注意深さ」「意欲」という三つの善き感情を抱くことはありうると見なされている⁽²³⁾。

マルキオンの議論に戻って考察するならば、マルキオンは、裁きの神が怒りの感情をもっていたことは認めるが、そのような感情を救済の神に当て嵌めることを拒否していた。救済の神が感情をもたない、という記述は、確かにストア派で理想化された「賢者」像と重なる部分があるように見えるが、ストア派が示すような、復讐に駆られた欲望としての怒りだけをもたないのか、それともテルトゥリアヌスが述べるように、エピクロス派が示すような、全くいかなる感情ももたないのかは明確にならない⁽²⁴⁾。神的存在や審判者の役割など異なった文脈の上での類似でもあり、概念や枠組みの類似だけで影響関係を分析することは困難であるだろう。

3. テルトゥリアヌスにおける「神の怒り」の弁明

マルキオンの教説を大部の著作によって論駁したテルトゥリアヌスは、既に若干ふれたように、義と善が切り離せないものであるとする主張を通じて、神の怒りなどの感情を弁証する。テルトゥリアヌスにとって創造神も救済神も同一の一なる神であるが、旧約聖書に拠れば、この神は悪⁽²⁵⁾や災いをも創造したとされる〔イザヤ45:7〕。しかし、テルトゥリアヌスに拠れば、ここで語られる悪について注意しなければならないのは、罪としての悪と、罰としての悪は区別されなければならないが、罪は人間を唆した悪魔に由来するが、

罰は神自身に由来するものであるという点である⁽²⁶⁾。ここで問題となるのは罰の方であるが、罰としての悪は、悪人の罪に敵対し、善人の善き行為に報いる正義と理解される。悪人にとって、罰としての悪は恐ろしいものであり、悪そのものに見えるが、善人にとっては悪には全くならず、むしろこのような罰としての悪を悪と見なす者自身が、悪人に属していることを自ら証明するようなものである。ここでは、審判者としての義が善と矛盾しない点が指摘されている。

また、マルキオンが否定した裁きにおける神の怒りなどの感情も、同様の議論のもとで理解される。

「それゆえに、審判者が実際に善 [bonus] で、つまり義 [iustus] であるならば、[神の] 厳しさ [seueritas] も善である。同様に、善き厳しさによる善き業がそれによって完遂される他の残りのすべてのもの、つまり怒り [ira] や、妬み [aemulatio] や、憤激 [sacuitia] も、善いものである」(テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』2, 16, 1)。

テルトゥリアヌスにとって、義なる裁きは善であり、そのような善き業に伴う感情は、怒りや妬みであっても善であると見なされる。すでにマルキオンに対するテルトゥリアヌスの批判で見たように、このような感情を否定するマルキオンは、哲学者たちの議論に唆されたとされる。テルトゥリアヌスの捉える哲学者たちに拠れば、神が怒り、気分を害するとすれば、神が腐敗ないしは劣化したことになり、その腐敗や変化を通じて死に至るに違いないとされる⁽²⁷⁾。哲学者の議論では、完全者である神は変化を被らない筈だと考えられているからである。テルトゥリアヌスは、決定的な存在論的变化としての神の死をも否定せず、むしろその復活を説いているが⁽²⁸⁾、これに関連するかたちで、神と人間は、概念上は同じ肉体や心の表象をもつとしても、実質的にはそれらが異なることを主張している。聖書の中で、神は右手、両眼、両足を持つと記述されても、それは人間の右手などと異なり、神の身体的表象は、老いて腐敗するものではない。同様に、神の怒りなどの感情も、人間のような不完全なものと同じと捉えるのはふさわしくないとされる。ま

た、忍耐や慈愛などの善い感情についても、確かにそれらは人間の言葉においては同一であっても、神のものと人間のものは異なっている。というのも、神は完全性においてそれらをもつからである。

「我々はそれら〔の感情〕を、完全なかたちではもたない。というのも、神だけが完全なかたちでもつ方だからである〔solus Deus perfectus〕。したがって、かの種類のもの、すなわち怒り〔irae〕、激情〔exasperationis〕の〔感情〕を、我々は適切なかたちで〔feliciter〕感じる〔patimur〕ことはない。なぜなら、神だけが不滅の特性に従って、適切なかたちで〔感じるからである〕」(テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』2, 16, 6)。

神は動揺することなく怒り、打ちのめされることなく激情の感情をもつ。神がこのような感情をももつのは、あらゆるものに対処するためである。神が怒りの感情をもつのは、悪事を働く者のためであるし、義憤の感情をもつのは、恩知らずの者たちのためである。しかし同時に、この神は罪を犯してしまった者たちのために慈愛をもち、悔い改める者たちのために忍耐をももつのである。これらすべての感情を、神は自らにふさわしいかたちでもっているものであり、人間と同様のかたちではない⁽²⁹⁾。

このような議論は、同時代の教父たちの思想において、必ずしも支配的なものであったとは言えないだろう。たとえば、オリゲネス(185頃-254頃)は、神が感情をもつことに対する批判が異端者たちによって行われていることを指摘したうえで、むしろ神はいかなる感情ももたないと説いている⁽³⁰⁾。マルキオンが特に問題とした旧約聖書だけでなく、新約聖書においても、確かに神が怒りによって悪人を滅ぼすかのように理解される箇所(ルカ19:11-27〔「ムナ」のたとえ〕、20:9-19〔「ぶどう園と農夫」のたとえ〕など)があるが、ここでは字義的解釈を避けて、霊的な解釈を探究すべきとオリゲネスは論じている⁽³¹⁾。テルトゥリアヌスとの相違は、単なる解釈方法においてだけでなく、神の存在論に関する理解においても大きなものとなっている。

また、テルトゥリアヌスの議論は、マルキオンの二神論に向けられている

ため、神における善と義が不可分であることを基軸として、神の怒りを弁証しようとしている。この点については、オリゲネスの議論も同様であり、彼は、神が義を通じて善を行い、善を通じて悪人を罰するのであって、義と善が切り離せないと言っている⁽³²⁾。テルトゥリアヌスの場合、罰としての悪が、悪人への懲罰のために必要なものとされており、これが神の怒りと関連付けられていた。しかし、罪としての悪と罰としての悪に関する議論については、何を指すかやや不明瞭な部分があり、またこれらの二つの悪と見なされうるものが明確に分類ないしは区別できるものであるかも明らかになっていないと言いがたい。

4. ラクタンティウスにおける「神の怒り」の弁明

テルトゥリアヌスは、先に分析した『マルキオン反駁』を著した前後に、正統教会から離脱してモンタヌス主義に転向するが、おそらくこの出来事を理由として、その後の時代の教父たちは、テルトゥリアヌスに大きな影響を受けつつも、彼の名を直接挙げることは避けていたように見える。特に強い影響を受けたカルタゴのキュプリアヌス(258年没)も、このカルタゴ司教とも対立することになったローマの対立教皇ノウァティアヌス(257/8年没)も、テルトゥリアヌスの名前を挙げることはなく、彼の名を挙げるのは、4世紀になってラクタンティウスが最初であると考えられている。異教からの改宗者であるラクタンティウスが、テルトゥリアヌスの名を挙げるのは、否定的な文脈で、それも神の怒りとは異なる文脈で数回だけであるが⁽³³⁾、名指しでなくても議論の継続性が見出せることはありうる。ここでは、テルトゥリアヌスのおよそ百年後の議論に目を向けてみたい。

313年のいわゆるキリスト教の公認後に書かれた『キリスト教徒迫害者の死』よりも若干後に著されたとされる『神の怒り』の中で、ラクタンティウスは、哲学者の教説に対抗するかたちで、神が怒りの感情をもつことについて弁明している。彼にとって、人間が真理に至るためには三つの段階を経なければならない。第一段階では偶像崇拜を放棄し、第二段階では至高神が唯

一であることを知り、第三段階ではその神が地上に派遣したキリストを認める必要がある。しかし、それぞれの段階で躓く者たちがおり、第二段階で躓く者たちの中に、神がいかなる感情にも動かされないと考える者たちがいるとされている⁽³⁴⁾。彼らは、あらゆる感情は弱さの証左であるために、神にはこのようなものは相応しくないと考えるのである。

「第二の段階から落ちると言われるのは、至高の神が一であるとは考えるが、哲学者たちの罫にかかり、その偽りの論証の虜となって、かの唯一の偉大なる神について真理とは異なったかたちで考えてしまう者たちである。このような者たちは、神にはいかなる姿形もないと主張したり、あるいはすべての感情は弱さのしるし〔*omnis adfectus inbecillitatis*〕であり、神にはいかなる弱さもないため、神はいかなる感情にも動かされない〔*nullo adfectu commoveri*〕と考える」(ラクタンティウス『神の怒り⁽³⁵⁾』2, 5)。

ラクタンティウスの論駁は、上述のような神における感情を否定する人々に向けられており、特にそれは主として哲学者たちが想定されているが、彼の議論は綿密に組み立てられたかたちで展開され、最初に神と感情の関係を四つの類型に分類している⁽³⁶⁾。

第一の類型は、神は怒りをもつが優しさをもたないとされており、これは類型上の議論であって、実際にこれを説く者はおそらく想定されていない。ここでは、神は害悪のみを造り出す存在であり、信仰の対象としての神には似つかわしくなく、不合理という点で万人が一致するとラクタンティウスは捉えている⁽³⁷⁾。

第二の類型は、神は優しさも怒りももたないとされており、これはエピクロス派を指している。エピクロスは、神が怒りの感情によって人間を傷付けることを恐れ、怒りを神から切り離したが、怒りだけ切り離すのは奇異であるため、優しさも一緒に神から切り離したとされる。ラクタンティウスは、神が人間の祈りも聞き入れず、崇拜する者に心を動かされないなら、この神は世界に働き掛ける摂理を失い、それによって神としての神性も失うであら

うと考えている⁽³⁸⁾。

第三の類型は、神は怒りをもたないが、優しさはもつとされており、これはストア派と一部の他の学派たちを指している。これは、第一と第二の類型よりはまともな立場であって、神は取り乱して怒り狂うことはなく、むしろ柔和で静穏であって、恵みによって世界を保護する存在であるとされる。ラクタンティウスは、この見解は一見するともっともらしいが、根本的な誤謬に陥っていると考える。善き者への愛は、悪しき者への憎しみから生まれるものであり、不敬や不義に対する怒りは、義に対する愛のために不可欠であるとされているからである⁽³⁹⁾。

以上の批判から、残された最後の第四の類型、すなわち、神は怒りと優しさの両方をもつとされるのが正しいとラクタンティウスは考えている。この類型に当てはまる哲学者はいないが、神は優しさを感じるために、怒りも感じるのであって、もし神が、自らを崇拜しない者に対して怒らないのなら、神を畏れる理由もないとされている⁽⁴⁰⁾。

以上の類型を挙げたうえで、ラクタンティウスは原子論など哲学の誤謬を挙げていくのであるが、テルトゥリアヌスと同様に、彼はこの世界における善と悪についてふれつつ、それを神の感情の議論に結び付けている。この世界に悪があるのは、人間が知恵によって善と悪を見分けるためであり、悪を退けることを知らなければ、何が善であるかを知ることでもできず、善を選ぶことも当然できないからであるとしている。神が善だけを創造したとすれば、人間には思考も知識も理性も必要ないが、悪が存在するゆえに、人間は知恵によって生きるものとされるのである⁽⁴¹⁾。このような人間の生と神の怒りの感情は結び付く。

「かくして、人間のなす事柄には、上記でその論理について説明した善〔bona〕と悪〔mala〕とがあるため、神は、正義が行われるのを見たときには優しさへ〔ad gratiam〕、不正を見たときには怒りへ〔ad iram〕と〔動かされ〕、必然的にこの両方向に動くこととなる」(ラクタンティウス『神の怒り』15, 5)。

神は善い行いを選ぶ者たちに対して恵みと見返りを与え、殺人や略奪を行う極悪非道なる者たちには、怒り、罰する。神は善人たちを保護するために、有害な者たちを怒りをもって滅ぼすが、それは善人を顧みるという点で、怒りそのものの中にも優しさが含まれていると主張される⁽⁴²⁾。それゆえに、神に優しさはあっても怒りはないとする第三の類型に属する主張は、空虚で誤りであるとラクタンティウスは考えるのである。

ラクタンティウスの議論は、テルトゥリアヌスの立場と異なり、基本的には神の感情の完全性によって神の怒りを弁証するようなものとはなっていない。テルトゥリアヌスにおいては、神は完全なかたちで感情をもつために、怒りも適切なかたちで表出されると考えられているが、ラクタンティウスには、そのような完全・不完全の議論はなく、むしろ神の怒りも人間の怒りも本質的にはその違いが明確にされえない。確かに、ラクタンティウスにおいても神と人間の怒りの相違についてはふれられている。人間は不当に怒りを感じることもあり、また有限な時間の中で一時的に怒りを覚える。そして、人間は肝臓から出る胆汁を原因として怒りという興奮状態が起きる。しかし、神は不当に怒ることはなく、永遠において怒り、肝臓や胆汁を原因として怒りに興奮することはない。神が肝臓を人間に与えたということは、怒りを人間に必要なものとしたということであり、その怒りを鎮めることも、神に倣って人間に必要なことであるとされる⁽⁴³⁾。ここには、神と人間の相違が展開されているが、この相違は、神が怒りをもつことの弁明には寄与しているようには見えない。

ラクタンティウスが説いた神の怒りに関する議論は、聖書の引用も殆どなく、途中で挙げられた四つの類型などから、哲学者や異教徒に向けて展開されたものであることが推測される。神の怒りと人間の怒りの間に、根本的な相違を措定しない彼の議論に対しては、そのような文脈も指摘されうであろう。

5. 結論

以上、神が怒りの感情をもつことをめぐって、キリスト教の異端的思想家であるマルキオンと、この人物の立場を批判したテルトゥリアヌスやラクタンティウスなど西方教父たちの議論を分析した。ここでは、救済神の怒りを否定する異端者と、神の怒りを弁証する教父たちという図式が見出されたが、オリゲネスに見られるように、これは古代全般に当てはまるものではない。即ち、2、3世紀の正統教父たちの中にも、何らかのかたちで、神の怒りの感情を否定する者は複数いた。しかし、グノーシス的な立場の否定、聖書の記述の解釈などを通じて、3世紀半ば以降、特に西方では神が怒りをもつことの意義を模索する立場が主流になっていったように見える。

註

- (1) 本稿は、2020年12月に歴史学系の研究者を中心として開催された「古代人の感情に関する共同研究」第4回研究会で行った発表を、大きく加筆・修正したものである。
- (2) たとえば、ユスティノス(100頃-160頃)は、ロゴスの能力を備えて生まれて来た人間についてふれている(『第一弁明』28,3)。
- (3) 出エジプト記30章34-38節。ここでは、材料、調合の仕方などが細かく指示されている。
- (4) たとえば、エイレナイオス(130頃-200頃)は、ナダブとアビフを、異説を持ち出す異端者たちと重ね合わせ、天からやって来る火で焼き尽くされることを正当化している(『異端反駁』4,26,2)。
- (5) テキストはFontes Christiani版を用いる。Tertullian, *Adversus Marcionem/Gegen Markion I*, Volker Lukas (hg.), Fontes Christiani Bd. 63/1, Freiburg, 2015.
- (6) この点については、テルトゥリアヌス自身が、マルキオンが光と闇の神々の対立を説くべきだったと指摘している(テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』2,29,4)。ただし、マルキオンが良い木と良い実、悪い木と悪い実の譬え(ルカ6:43-45)を神論に関連付けて説いていたことから(テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』1,2,1-2)、この引用文が実際のマルキオン派のものである可能性もありうるが、上述のテルトゥリアヌスの文章や様々な教父たちの記述から推察するならば、マルキオン自身は善の神と

悪の神の二元論は説いていなかったと考えられる。

- (7) テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』2, 12, 1.
- (8) テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』3, 24, 1-2. Cf. テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』3, 6, 8.
- (9) Cf. テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』5, 3, 9.
- (10) テキストは、Fontes Christiani 版を使用し、小林の邦訳も参照した。Irenäus von Lyon, *Adversus Haereses/Gegen die Häresien III*, Norbert Knox (hg.), Fontes Christiani Bd. 8/3, Freiburg, 1995 (エイレナイオス『異端反駁Ⅲ』小林稔訳、キリスト教教父著作集第3巻Ⅰ、教文館、1999年)。
- (11) キリスト教神学という観点における聖書的なキリスト教的宗教と古代ギリシア文化との関係については、有賀鐵太郎のハヤトロギアとオントロギアの議論を手掛かりに、芦名が問題点を整理している。芦名定道『自然神学再考 — 近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007年、30-34頁。
- (12) テルトゥリアヌス『異端者たちへの異議申し立て』7, 1-5.
- (13) Adolf von Harnack, *Marcion: Das Evangelium vom Fremden Gott: Eine Monographie zur Geschichte der Grundlegung der katholischen Kirche*, 2te Auflage, [1924], 1996, S. 5-18.
- (14) A. v. Harnack, [1924] (1996), S. 18* (「*」は補遺の頁数を指している)。
- (15) Enrico Norelli, "Marcion: ein christlicher Philosoph oder ein Christ gegen die Philosophie?", in: *Marcion und seine kirchengeschichtliche Wirkung*, Gerhard May und Katharina Greschat (hg.), Berlin, 2002, S. 113-130.
- (16) この点については、拙著においてすでにふれた。『マルキオン思想の多元論的構造 — プトレマイオスおよびヌメニオスの思想との比較において』一麦出版社、2013年。
- (17) Max Pohlenz, *Vom Zorne Gottes: Eine Studie über den Einfluß der griechischen Philosophie auf das alte Christentum*, Göttingen, 1909, S. 20-22. ただし、ポーレンツは、テルトゥリアヌスの記述 (『異端者たちへの異議申し立て』7, 3) を基にして、先述のような議論を展開している。
- (18) Max Pohlenz, *Die Stoa 2. Band: Geschichte einer geistigen Bewegung*, Göttingen, 1948, S. 198-199.
- (19) *ibid.*, S. 198-199; Max Pohlenz, *Die Stoa 1. Band: Geschichte einer geistigen Bewegung*, Göttingen, 1948, S. 410-411.
- (20) テキストは Oxford Classical Texts 版を用い、加來の邦訳も参照した。Diogenes Laertius, *Vitae Philosophorum II*, H. S. Long (ed.), Oxford Classical Texts, Oxford, 1964 (ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝(中)』加來彰俊訳、岩波書店、1989年)。
- (21) テキストは Les Belles Lettres 版を用い、兼利の邦訳も参照した。Sénèque,

- Dialogues: Tome 1, De ira*, A. Bourgerie 8ed., Les Belles-Lettres, 157, Paris, 1922 (セネカ『怒りについて 他二篇』兼利琢也訳、岩波書店、2008年)。
- (22) セネカ『怒りについて』1, 8, 1-3.
- (23) 廣川洋一『古代感情論 プラトンからストア派まで』岩波書店、2000年、189頁。
- (24) テルトゥリアヌスは、『マルキオン反駁』では主としてマルキオンの立場をエピクロスに近接させて論じているが、『異端者たちへの異議申し立て』の中ではストア主義と結び付けている(7, 3)。
- (25) 「悪〔κακά〕」の記述は七十人訳による。
- (26) テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』2, 14, 2.
- (27) 神は不変な存在であるかをめぐって、J. M. ホールマンは主としてテルトゥリアヌスの議論を分析し、彼の思想と哲学との相違を論じている。Cf. Joseph M. Hallman, "The Mutability of God: Tertullian to Lactantius", in: *Theological Studies*, 42, 3, Woodstock, 1981, pp. 373-393.
- (28) テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』2, 16, 3.
- (29) J. M. ホールマンは、神における感情と人間における感情の本性的相違が、テルトゥリアヌスの議論の特徴と捉えている。J. M. Hallman, (1981), pp. 379-380. また、特に西方教父における神の怒りに関する概念史を扱った M. C. マッカーシーも、同様の結論を導いている。Michael C. McCarthy, "Divine Wrath and Human Anger: Embarrassment Ancien and Jew", in: *Theological Studies*, 70, Woodstock, 2009, p. 861.
- (30) 「神は全くの無情念であり〔deum penitus impassibilem〕、すべての感覺的な情念をもたない〔omnibus carentem affectibus sentiendum〕」(オリゲネス『原理論』2, 4, 4)、「賢明で、情念をもたない方〔avpaqh. j〕である花婿〔即ち神〕は……」(『殉教の勧め』10)。テキストはそれぞれ、以下のものを参照した。Origenes, *Vier Bücher von Prinzipien*, Herwig Görgemanns und Heinrich Karpp (hg.), Texte zur Forschung 24, Darmstadt, 1976; Origenes, *Aufforderung zum Martyrium*, Maria-Barbara von Stritzky (hg.), Origenes Werke mit deutscher Übersetzung 22, Berlin, 2010. なお、聖書の記述から導き出される、神は妬む方であり、他方で神は人間を憐れむ方であるとする解釈との整合性から、オリゲネスにおける神のアパテイア概念は複雑な議論を孕む。これに關しては、土井の研究を参照した。土井健司『愛と意志と生成の神——オリゲネスにおける「生成の論理」と「存在の論理」』教文館、2005年、95-117頁。
- (31) オリゲネス『原理論』2, 4, 4.
- (32) オリゲネス『原理論』2, 5, 3.
- (33) ラクタンティウス『神的綱要』5, 1; 5, 4 など。
- (34) ラクタンティウス『神の怒り』2, 2.
- (35) テキストは *Texte zur Forschung* 版を用い、高橋の邦訳も参照した。Laktanz, *Vom Zorne Gottes*, H. Kraft und A. Wlosok (hg.), *Texte zur Forschung* Bd. 4, Darmstadt,

1974 (ラクタンティウス、高橋英海訳「神の怒りについて」『中世思想原典集成4 初期ラテン教父』平凡社、1999年、305-388頁).

- (36) ラクタンティウス『神の怒り』2, 9.
- (37) ラクタンティウス『神の怒り』3, 1-5.
- (38) ラクタンティウス『神の怒り』4, 1-15.
- (39) ラクタンティウス『神の怒り』5, 1-17.
- (40) ラクタンティウス『神の怒り』6, 1-2.
- (41) ラクタンティウス『神の怒り』13, 1-19.
- (42) ラクタンティウス『神の怒り』16, 4.
- (43) ラクタンティウス『神の怒り』21, 1-7.